瀬戸内海からの珍客？

白浜町にエビクラゲ漂着

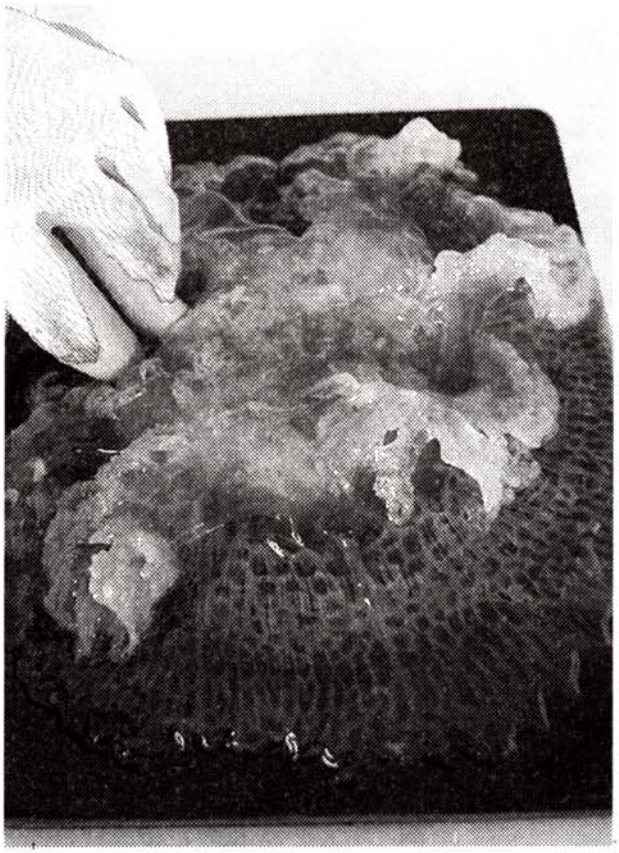
家集収見る つけ る

白浜町臨海の北浦海岸で、貝殻の採集をしていた同町東白浜の貝収集家、真鍋鬣さん（65）が8日朝、今までに見たことのない傘径20㌢ほどもある大型クラゲを発見した。京都大学瀬戸臨海実験所の久保田信・助教授（51）が調べたところ、紀南地方には生息していないエビクラゲであることが分かった。

久保田助教授によると、同実験所に赴任して以来、十数年で2個体見ているが、紀南地方では非常に珍しいクラゲだという。エビクラゲは瀬戸内海や九州沿岸に生息しており「潮に乗って瀬戸内から流されてきた可能性が高い」と話している。

真鍋さんは「昔から潮が濁ると瀬戸内海からの鳴門潮が田辺湾に入ってきていると言われている。この日も鳴門潮が来ていて、クラゲと一緒に『明石浦漁協（兵庫県明石市）』と書かれたコンテナも流れ着いていた」と話した。

エビクラゲは日本の太平洋側で最大種であるイボクラゲ（最大傘径50㌢）の仲間。薄いブルーをしていて口腕の触手が非常に小さい。最大では傘径25㌢ほどになる。口の付近に小さなエビが住んでいることが多いため、この和名が付いた。生活史についてはほとんど分かっていない種類。



△紀南地方では非常に珍しいエビクラゲ（白浜町の京都大学瀬戸臨海実験所で）